

## ダニエル書1章1-7節 「バビロン生活の始まり」

### 1A 主の行われた捕囚 1-2

1B 二人の王 1

2B 神の宮 2

### 2A バビロンへの同化 3-7

1B 王族の捕囚 3

2B 宮廷の僕 4-5

1C 身体と知性 4

2C 文学とことば 4

3C 食事 5

3B 名前の剥奪 6-7

1C 神賛美のヘブル名 6

2C バビロン神賛美の新名 7

## 本文

ダニエル書 1 章を開いてください、今晚は 1 章の前半部分、1 節から 7 節までを見ていきたいと思えます。前回は、ダニエル書の導入として、この書物が神のご計画全体に占める位置についてお話ししました。今回から、本文に入っていきます。

### 1A 主の行われた捕囚 1-2

<sup>1</sup> ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカドネツアルがエルサレムに来て、これを包囲した。<sup>2</sup> 主は、ユダの王エホヤキムと、神の宮の器の一部を彼の手に渡された。彼は、それをシニアルの地にある自分の神の神殿に持ち帰り、その器を自分の神の宝物倉に納めた。

バビロン捕囚からダニエル書は始まります。捕囚と言っても三回ありました。バビロン捕囚と言っても主に三回ありました。第二次捕囚から紹介しましょう。ここに出て来るエホヤキムが死に、その子エホヤキンが王になった時です。長くなりますが、そこの部分を読んでみましょう。「Ⅱ列王 24:8-17」<sup>8</sup> エホヤキンは十八歳で王となり、エルサレムで三か月間、王であった。彼の母の名はネフシュタといい、エルサレム出身のエルナタンの娘であった。<sup>9</sup> 彼は、すべて先祖たちがしたように、主の目に悪であることを行なった。<sup>10</sup> そのころ、バビロンの王ネブカドネツアルの家来たちがエルサレムに攻め上り、都は包囲された。<sup>11</sup> バビロンの王ネブカドネツアルが都にやって来たとき、彼の家来たちは都を包囲していた。<sup>12</sup> ユダの王エホヤキンは、その母、家来たち、高官たち、宦官たちと一緒にバビロンの王に降伏したので、バビロンの王は、その治世の第八年に、彼を捕虜にした。

<sup>13</sup> バビロンの王は、主の宮の財宝と王宮の財宝をことごとく運び出し、主の神殿の中にあるイスラエルの王ソロモンが作ったすべての金の用具を切り裂いた。主が告げられたとおりであった。<sup>14</sup> 彼はエルサレムのすべて、すなわち、すべての高官、すべての有力者一万人、それに職人や鍛冶もみな、捕囚として捕らえ移した。貧しい民衆のほかは残されなかった。<sup>15</sup> 彼はさらに、エホヤキンをバビロンへ引いて行き、王の母、王の妻たち、その宦官たち、この国のおもだった人々を、捕囚としてエルサレムからバビロンへ行かせた。<sup>16</sup> バビロンの王は、すべての勇士たち七千人と、職人、鍛冶千人からなる勇敢な戦士たちすべてを、捕囚としてバビロンへ連れて行った。<sup>17</sup> バビロンの王は、エホヤキンのおじマタンヤをエホヤキンの代わりに王とし、その名をゼデキヤと改めさせた。」

これは、紀元前 597 年のことです。エホヤキムはバビロンの王ネブカドネツアルによって立てられましたが、エホヤキンはその息子であり、ユダ王国が勝手に擁立したことになります。バビロンの傀儡でないので、バビロンはこれを反逆と見なし、即位してから三か月して、これだけの大規模な捕囚を行ったのです。この時に、神の宮の金の用具をすべて切り裂いて持っていきました。そして、この時に捕え移されたのが、預言者エゼキエルです。エゼキエルは、第二次バビロン捕囚の時に共に捕え移され、捕囚の地で神の啓示を受けました。

この時に、エゼキエルは、ダニエルのことについてすでに神から語られていました。「エゼ 14:14 だとえ、そこにノアとダニエルとヨブの、これら三人の者がいても、彼らは自分たちの義によって自分たちのいのちを救い出すだけだ——【神】である主のことば——。」義人の代表例として、ノアとヨブに並んで、ダニエルを名指ししておられます。ノアもヨブも、彼の時代からしても大昔の人です。けれどもダニエルは同時代の人です。それだけダニエルは、悪い時代において義の中で生きた人として、神は認めておられたのです。その彼の生活をこれから見ていくので、幸いですね。

そして、最後の節で読んだように、バビロン王は、エホヤキムの兄弟、すなわちヨシヤ王の息子で、エホヤキンの叔父にあたるゼデキヤを王に立てます。そして紀元前 586 年に、第三次バビロン捕囚があります。ゼデキヤ王が即位してから九年目にして、バビロンに反逆しました。それで神殿が破壊され、捕囚は終わります。残された土地が荒れることがないように、そこを耕す、ごくわずかの貧しい農民は残されていましたが、すべての者たちが捕え移されました。ところで、この間、ヨシヤ王の時代からエルサレムが破壊されるまで、ずっとエルサレムで預言していたのがエレミヤです。彼は、初めは悔い改めなさいと教え、最後はバビロンに降伏せよという主の預言を伝えました。それゆえに、迫害され、孤独を味わいましたが、果たして彼の言ったとおりにになりました。

そして、今読んだ、ダニエル書 1 章 1-2 節は、第一次の捕囚で紀元前 605 年でした。ここにあるとおり、エホヤキンの前のエホヤキムが治世を取っていた時で第三年目です。ここで大きな出来事が起こります。それは、ユダ王国やその周囲の地域は、基本的に長いこと、南のエジプトの影響下にありました。けれども、アッシリアが攻めて来て、アッシリア捕囚がかつてありました。ヒゼキ

ヤの時代は、エルサレムの周辺はみな攻め取られましたが、しかしエルサレムで 18 万人のアッシリア軍が一気に倒され、軍を引き返しました。そこで、ヒゼキヤ王が大きな国となるのですが、それもつかの間、エジプトが再びここに支配圏を持ちます。

この勢力圏が大きく変わったのは、カルケミシュの戦いであります。カルケミシュはユーフラテス川の上流地域にあり、アッシリアの残党がニネベからここに逃げてきたのをバビロンが追っていました。そこにアッシリアに挑戦しようとして、エジプトの王ネコが北上します。しかし、エジプトは戦いに負けて、仕方がなく自国に戻ります。

### 1B 二人の王 1

ところで、ネコが北上していった時に、ヨシヤ王が戦いに臨みにきました。しかしネコによってメギドで倒されました。ヨシヤの後、エジプトが、ヨシヤの子エホアハズを王としました。けれども、エジプトの王は彼を捕え移し、エジプトに連れて行きました。ヨシヤの他の息子エホヤキムを王にしました。けれども、すでにエジプトはカルケミシュの戦いでバビロンに敗北しています。このユダの王を、自分に服従させるため、バビロンの王ネブカドネツアルはエルサレムに攻め上って来ます。つまり、ユダはエジプトに仕えていましたが、この時からバビロンが自分たちの主人となりました。大きな転換期となったのです。ネブカデネザルが、自分がユダにとっての支配者になったのだということを示すために、神の宮から器を取り出し、また 3 節にあるように、王族や貴族数人を捕え移したのです。

ここで大事なことは、次です、この捕囚を行わせたのは、他にもない主ご自身だったということですよ。2 節の主語が「主は」となっています。行っているのはネブカドネツアルなのですが、そのネブカドネツアルをご自分のしもべとして神は用いられ、ご自分のみこころを行われました。そのことが詳しく書かれているところが列王記第二 24 章にあります。「24:3-4 実に、このようなことがユダに起こったのは、ユダを主の前から除くという【主】の命によることであり、それはマナセが犯したすべての罪のゆえ、また、マナセが流した咎のない者の血のためであった。マナセはエルサレムを咎のない者の血で満たした。そのため【主】は赦そうとはされなかったのである。」ヒゼキヤの息子マナセが、幼き子たちを偶像のために火に捧げたという罪に対して、主はユダを取り除くと決められました。マナセの孫がヨシヤで、宗教改革を行ったものの、神の裁きは先延ばしにされただけで、裁きが取り下げられることはありませんでした。

そこで、ここで非常に大事なことがあります。当時のエルサレムの王たちは、自分たちの国をいかにして生き残らせるかということに腐心していました。国際情勢に激変が起きました。エジプトがバビロンと戦い、エジプトではなくバビロンに仕えなければいけなくなりました。日本で分かりやすくいうならば、中国とアメリカが戦い、中国が勝ち、私たちの同盟をアメリカから中国に移さなければいけないかどうか問われる、というような状況です。そして、バビロンが優勢であることが分

かって来ると、今度はバビロンから自分たちを守るかということに焦点を合わせていました。預言者も祭司も、神殿のあるエルサレムには神が共におられるのだから、だからバビロンからの救いを強く願い、祈ったのです。ところが、その動きに真っ向から反対する預言を行ったのが、エレミヤだったのです。それで、彼らは激しく迫害したのです。

私たちが、今の時代、激変の時代、圧迫の時代に生きています。そして、どのようにして生き残ることができるのかを、国が、そして国民が考えます。けれども、私たち神を信じている者が、真っ先に考えなければいけないのは、「私たちの主が、このようにされている。」ということなのです。これは、私たちがこうあってほしいと願っているものとは真逆かもしれません。実に不快であり、考えたくもない悪夢でさえあり得ます。けれども、そこで私たちは、今、起こっていることについて安易に、「このことは大事だから、何としてでも守らなければいけない。」と反応してはならないのです。「このことが守られるように祈るし、聖書の言葉もそのために用いていく。」となってしまいます。けれども、エレミヤやエゼキエル、そしてダニエルなどの預言者は、全く別のことを考えていました。「あなたがたが、主に逆らっているから、これこれの災いが起こっているのだ。」ということなのです。主の関係はどうなのか？主に命じられていることを行っているのか？それらを問うているのです。

もしかしたら、「そんなこと言ったって、神を愛する者たちは、すべてのことを相働かせて益としてくださいと、神は言われたのではないか！なんで、悪いことが起こるのか。」と反論するかもしれませんが、いいえ、私たちの自己中心的な思いは、その「益」ということも、自分のための益と考えてしまい、神の目からの益と考えることが多いのです。ローマ 8 章 28 節に、その約束がありますが、続き 29 節には、こうあります。「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。」私たちが、御子と同じ姿に変えられていくことが益なのだということです。主に従い、明け渡すこと、今、あるところに主がおられること。これを信じていくのです。

そして、ここ主がこれらのことをすべて行ったというところに、ダニエルと友人は生きていました。自分たちが捕らえられ、そこで去勢させられ、バビロンに同化させられ、そうやって生きていくことに、なんで神がおられるのか！と思うかもしれませんが、しかし、これがみこころだとして、ダニエルたちは生きて行ったのです。ゆえに、彼はどこにおいても主を認めることができ、そのバビロンの生活においても主に従い、証しを立てることができました。いろいろなことが起こっていても、主がこのことをなしておられるのだとへりくだる時に、ダニエルのように主に仕える姿勢が生まれます。

## 2B 神の宮 2

そして 2 節ですが、エルサレムにある神の宮から器を、ネブカドネツアルが、自分たちの神々の宮に移したとあります。場所は、「シニアルの地」です。前回の学びのように、ここがバベルの塔がたてられる地であり、人々が主に対して相逆らったところでもあります。

そして、バビロンの神はマルドゥクという名でした。当時の世界は非常に宗教的で、自分たちがある国を征服すると、このように相手国を代表する神のものを、自分の神のところに持ってくることによって、自分たちの神がその国の神を征服したと考えます。これは異教徒たちにとっては、明らかに、マルドゥクがイスラエルの神、ヤハウェを征服したとみえています。しかし、ここからダニエル書は始まり、徐々に、ダニエルの神、友人三人の神が、他の神々とは違い、はるかにすぐれた方で、天におられる神なのだということが証しされていきます。ダニエルが解き明かした夢、三人の燃える火の炉からの救い、そして塗り壁に現れた、何か物を書く人の指、そして獅子の穴からの救いです。これらによって、ネブカドネツアルや、メディアの王ダレイオスが、ダニエルの神をほめたたえることにつながります。

似たような話が、サムエル記第一にありますね。イスラエルの民が、ペリシテ人との戦いで神の箱を持ってきたところ、ペリシテ人に奪い取られてしまいました。ペリシテ人は、自分たちの神、ダゴンの宮に、ダゴンの横に神の箱を安置しました。ところが、ダゴンが倒れていて、首から折れて、頭が離れていました。そして、災いがペリシテ人の町に襲いました。偶像の神々がいかにも優れているかのように横に並べられても、神はそれを自ら拒まれるのです。

神は、他の神々と同列にされることをひどく嫌がられます。エルサレムを取り囲んだアッシリアに対して、その軍を滅ぼしたのは、アッシリアの王が同列にエルサレムの神を語ったからです。「Ⅱ歴代 32:19 彼らは、人の手のわざである、地上の民の神々について語るのと同じように、エルサレムの神について語ったのである。」異教徒は、すべてが地域の神々であり、だからエルサレムもエルサレムだけにいる神々だと、アッシリア王センナケリブは思ったわけですが、いいえ、天におられる神、すべての国々の神であります。それで、その圧倒的な、比類なき姿を、一夜にして15万の軍を滅ぼすことによってお示しになりました。私たちは、ゆえに、この方をそのような方としてお見せしていく、証しして行く必要があります。

つまり、まるで助けなければいけない方であるかのように、自分が守ろうとする必要はありません。自分の望むことを成し遂げてくれる神であるかのように見せてはいけません。自分の願いではなくとも、神のみこころがなることを願い、この方にひれ伏す時に、その弱くされた私たちに、力強い神がそのような方として、周囲に証ししてくださるのです。

## **2A バビロンへの同化 3-7**

### **1B 王族の捕囚 3**

<sup>3</sup> 王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエルの人々の中から、王族や貴族を数人選んで連れて来させた。

先ほどマナセのことについて話しましたが、その父ヒゼキヤに対して、預言者イザヤが預言して

いました。アッシリアからエルサレムが救われました。それで国々が貢ぎ物をヒゼキヤのところに持って来ました。ユダ王国が再び自由を得、名声を得たのです。ヒゼキヤは、自らの功績をほめる高慢が芽生えていました。バビロンからの使者に、宝物蔵にあるものを全て見せました。イザヤが来て、こう預言しました。「イザヤ 39:6-7 見よ。あなたの家にある物、あなたの父祖たちが今日まで蓄えてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日々が来る。何一つ残されることはない——【主】は言われる——。また、あなたが生む、あなた自身の息子たちの中には、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がいる。」この時にイザヤが預言していた「宦官となる者」が、ダニエルや友人三人であります。

ネブカドネツアルは、自分の国を治めるにあたって、征服した国々の王族から自分に仕える者たちを選びました。それは、まず、もし従属している人々が反乱を起こすとしたら、自分たちの王族にいる者たちから王を立てるはずだからです。ですから、その王族から若い者たちを選んで、彼らをバビロンに同化させて、バビロン人のようにさせて、それで齒向かうことができないようにするためです。二つ目に、王族や貴族であれば、すでに王に仕えることがどういうことか、その育ちや教育から、もう用意できている部分があるからです。

## 2B 宮廷の僕 4-5

### 1C 身体と知性 4

<sup>4</sup> それは、その身に何の欠陥もなく、容姿が良く、あらゆる知恵に秀で、知識に通じ、洞察力に富み、王の宮廷に仕えるにふさわしく、また、カルデア人の文学とことばを教えるにふさわしい少年たちであった。

まず、王に仕えるにふさわしい素質について述べられています。まず、身体に障害がなく、容姿にすぐれていることです。これが世における標準でした。サウルがイスラエルの王に選ばれた時、彼が非常にハンサムで背が高かったことを思い出してください(1サムエル 9:2)。そして、知的に優れていることもあります。ダニエルと友人らは、このことに適合でした。しかし、これから、彼らがそれだけではないことを、神が明らかにしていけます。

もっと大切なもの、霊的素質を彼らは持っていました。かつてヨセフがそうでした。エジプトにおいて、彼は美男子であったためにポティファルの妻に言い寄られました。けれども神を恐れて、その場から逃げました。後のペルシア時代の王妃エステルも同じです。彼女は美人でした。けれどもそれ以上に、養父モルデカイによく従い、宦官が勧めたものの他は、何も求めない慎みがありました(エステル 2:10,15)。自然に与えられた才能があるから、この人はいろいろなことができるのだというのは、キリスト者の間ではそうではないということが、ここからはっきりと分かります。主から与えられる賜物が必要であり、そのためにはこの方にひれ伏した生活が必要です。

## 2C 文学とことば 4

そして、「カルデア人の文学とことば」を教わりました。カルデア人は、バビロンの元来の民族です。日本が大和民族から発生しているところから、同じことが言えます。ここでユダの民であることから、彼らがバビロンに仕える者としての準備が行なわれたのです。いわば、「バビロン同化教育」です。文学を教わることによって、自分たちのユダヤ性が失われます。バビロンのことばを習うことによって、彼らの言葉、ヘブル語が失われて生きていきます。こうやって、自分たちが大きく、その文化や習慣の変化を強いられて、人格の改造のようなものを経て行ったのです。

私たちは、世の終わりに生きる時に、このような自分自身を変えられてしまうような変化を強いられます。終わりの日に現れる獣は、「時と法則を変えようとする。」と預言されています(7:25)。世界全体がそうになっていくのです。コロナ禍において、そのような生活の変容を少し強いられているのかもしれませんが。ダニエルたちはそれを自分自身の体で強いられていたといってもよいでしょう。私たちは、これまでの生き方、習慣、世界観、文化、そういったものが根底からひっくり返されるようなことを、少しずつ強いられているのかもしれませんが。

しかし、ここにダニエルと友人から、励ましを受けます。それであっても、彼らは変わらずに、主がともにおられることを信じて行ったのです。大きく生活が変容を強いられても、それでも、これらのことは神から来ていると信じていました。だから、この中に神の御心があると信じることができ、それで、彼らは変わらず主に仕えることができます。私たちの主イエス・キリストは、「昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。(ヘブル 13:8)」

## 3C 食事 5

<sup>5</sup> 王は、王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当てた。三年間、彼らを養育して、その後で王に仕えさせることにした。

バビロンへの同化、そして王に仕える者としての同化で、かなり効果的なのが、王の食べる者と同じものを食べることです。王からの恵みとして食事をして、それで自分が王に属する者となっていく、同時に、王と共に治めていく者として整えられていきます。これは当時の習慣として行われており、捕えられたエホヤキン王は後にバビロンで牢屋から釈放され、バビロンの王が彼を自分の食卓の席に付かせました。ヨセフも、カナン地の地から来た兄たちを自分の食卓に着かせました。ダビデが、ヨナタンの息子メフィボシェテを同じ食卓に着かせました。そして、教会に対してもイエス様は、ラオディキアの教会の者たちに、「悔い改める者には、共に食べる、」と約束されました。とこれは、王と同じ恵みにあずかることを意味すると同時に、王にはもう決して逆らわない、王のものにされていることも表しています。

しかし、ここにおいては、神のみことばがありました。ダニエルが自分の身を汚さないと心に定め

ところが、次回の学び、8 節以降に出てきますので、そこでじっくり見ていきましょう。

### 3B 名前の剥奪 6-7

#### 1C 神賛美のヘブル名 6

<sup>6</sup>彼らのうちには、ユダ族のダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。

ユダヤ人名を見ると、そこに両親の信仰深さを垣間見ることができます。ダニエルは「神は裁き主」です。ハナンヤは「ヤハウエは恵み深い」です。ミシャエルは「神である方は誰か」です。そしてアザルヤは、「主は助けられる」です。これら親の信仰が、彼らが完全にバビロン化されることから彼らを守りました。ちょうどモーセがそうでした。パロの娘によって乳母として雇われた実の母は、モーセが乳離れするまでの間、ヘブル人の神の知識を植え付けていたはずですが、なぜなら、彼もエジプト人のあらゆる学問を教え込まれたにも関わらず(使徒 7:22)、40 歳の時に同胞のイスラエル人を助けようとして、「主の教育と訓戒によって育てなさい。(エペソ 6:4)」の教えは非常に大切です。

そして王族の全ての人々が腐敗していたわけではないことを、ここの箇所は教えています。当時のエホヤキムはエレミヤに激しい敵対心を抱いていましたが(エレミヤ 36 章)、王の周囲の人々は彼の預言を聞き、一部の人はその言葉を恐れていました。ダニエルは、もしかしたら幼い時に、こうしたエレミヤが語っている姿を見ていたかもしれません。ダニエル自身が、9 章で、エレミヤの預言を読み、それで断食をして祈りに導かれました。そして、ユダヤ人たちがバビロン崩壊後、祈りが聞かれてエルサレムに帰還することができたのです。私がエレミヤであったなら、自分が行なっている事は本当に徒労に終わっていたと完全に落胆していたと思いますが、決してそうではないことをダニエル書は教えてくれます。

#### 2C バビロン神賛美の新名 7

<sup>7</sup> 宦官の長は彼らに別の名前をつけた。すなわち、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナンヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。

これは、究極のバビロンへの同化です。名前が、イスラエルの神の名から、バビロンの神の名がついているものに変えられたのです。「神は裁き主」であるダニエルは、「ベルテシャツアル」で「ベルのご加護を」という意味です。ベルはバビロンの神です(イザヤ 46:1)。「ヤハウエは恵み深い」のハナンヤは、「シャデラク」つまり、バビロンの太陽神「ラク」を指し、「太陽神の光を受ける」という意味です。「神である方は誰か」という意味のミシャエルは「メシャク」で、「アクである方は誰か」です。イスラエルの神から異教の神アクに摩り替えられました。そして、「主は助けられる」のアザルヤは、「アベデ・ネゴ」です。これは「ネボのしもべ」です。ネボは、バビロンの神ベルの息子と考えられています(イザヤ 46:1)。自分の名前というのは自分が誰であるかを知るアイデンティティー



になります。ヤコブが主によってイスラエルと新しい名が与えられましたが、そのように変えられるのです。彼らは、このようにして世の者として生きなければいけません。異教の神の名が自分の名になっているのです。

しかし、ここにおいて、自分はなおもユダヤ人であり、ユダヤ人の神をあがめており、この方に仕えているというアイデンティティーを持っていたことを、次回、見ていきます。心に定めるということが必要になりますが、それは次回の学びです。ここでは、主がここバビロンに自分を遣わしたのだという確信が自分たちにあったということです。それが、自分を内側から改造させられるような、バビロンへの同化が強えられることでもありました。あまりにも不本意な仕打ちです。けれども、彼らはそういうところを通るのも、神のみこころだとしていました。だからこそ、いざという時に主のみこころを選び取ることができるのです。

私たちは、これは当然の権利だから、という考えが強いです。外から理不尽な仕打ちを受けた時に、それは訴えるべきであるとみなします。そういう時もあるでしょう。けれども、そのような時に、せつかくの、不利な状況におかれている中で主の証しができなくなります。むしろ、その不利な状況が神によって与えられたと信じ、理解はできなくともそこに留まることによって、神が現れてくださいます。「Ⅰペテ 2:19-21 もしだれかが不当な苦しみを受けながら、神の御前における良心のゆえに悲しみに耐えるなら、それは神に喜ばれることです。20 罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、それは神の御前に喜ばれることです。21 このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」